

# 「鳥獣戯画研究の最前線」

日時：令和3年4月23日（金）・4月24日（土） 13:00～17:00

会場：東京国立博物館 平成館大講堂



## ■4月23日（金）

第1講 13:10～14:00

「鳥獣戯画の伝わった寺—高山寺と明恵上人をめぐる美術—」

—— 休憩（15分）——

第2講 14:15～15:30

「鳥獣戯画研究のこれまでとこれから」

—— 休憩（15分）——

第3講 15:45～17:00

「何が、どのように描かれているのか？—図様と表現の特質—」



## ■4月24日（土）

第4講 13:00～13:50

「誰が描いたのか？—絵師をめぐる議論—」

—— 休憩（15分）——

第5講 14:05～14:55

「何のために描かれたのか？—主題と制作背景を探る—」

—— 休憩（20分）——

第6講 15:15～17:00

パネルディスカッション「徹底討論！鳥獣戯画研究を究める」



## 受講券について

受講券は、2日目にも必ずお持ちいただき、ご入館・大講堂入場時にご提示ください。

## 連続講座「鳥獣戯画研究の最前線」

### ごあいさつ

鳥獣戯画といえば、誰もが知る、日本美術の中でも抜群の知名度を誇る作品です。ただ、その成立や主題、制作目的などは謎に包まれています。本講座は、特別展「国宝 鳥獣戯画のすべて」の開催に合わせ、本絵巻の伝わった高山寺の歴史を踏まえ、多角的な観点からこの謎多き絵巻の徹底解明に挑みます。

### スケジュール

■4月23日（金）

13：00～13：10

ごあいさつ 田村裕行（高山寺執事長）

趣旨説明

13：10～14：00 第1講「鳥獣戯画の伝わった寺—高山寺と明恵上人をめぐる美術—」

①明恵上人と高山寺の文化財

講師：大槻信（京都大学大学院文学研究科教授）

②明恵上人坐像の作者は誰か？—高山寺の彫刻と慶派仏師をめぐる—

講師：皿井舞（東京国立博物館平常展調整室長）

—— 休憩（15分） ——

14：15～15：30 第2講「鳥獣戯画研究のこれまでとこれから」

③鳥獣戯画八〇〇年の生命誌—伝来と研究史をたどる—

講師：土屋貴裕（東京国立博物館特別展室主任研究員）

④鳥獣戯画「平成の修理」の成果と展望

講師：朝賀浩（宮内庁長官官房参事官）

⑤欧米がみた鳥獣戯画—近代における海外出品をめぐる—

講師：鬼頭智美（東京国立博物館上席研究員(国際交流)）

—— 休憩（15分） ——

15：45～17：00 第3講「何が、どのように描かれているのか？—図様と表現の特質—」

⑥平安絵巻としての鳥獣戯画—ストーリー展開の妙味—

講師：井並林太郎（京都国立博物館企画室研究員）

⑦白描画としての鳥獣戯画—線描の妙技—

講師：古川攝一（東京国立博物館絵画・彫刻室研究員）

⑧「鳥獣戯画」乙巻にみる宋画的要素

講師：猪熊兼樹（東京国立博物館特別展室長）

■4月24日（土）

13：00～13：50 第4講「誰が描いたのか？—絵師をめぐる議論—」

⑨宮廷絵師説の可能性—「伴大納言絵巻」との近さを視野に入れて—

講師：五月女晴恵（北九州市立大学文学部教授）

⑩絵仏師説の可能性—鳥羽僧正覚猷説と当時の寺院の社会性の観点から—

講師：大原嘉豊（京都国立博物館保存修理指導室長）

—— 休憩（15分） ——

14：05～14：55 第5講「何のために描かれたのか？—主題と制作背景を探る—」

⑪正倉院宝物と鳥獣戯画

講師：増記隆介（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

⑫鳥獣戯画の主題解釈は可能か？

講師：三戸信恵（山種美術館特任研究員）

—— 休憩（20分） ——

15：15～17：00 第6講 パネルディスカッション「徹底討論！ 鳥獣戯画研究を究める」

## 第1講「鳥獣戯画の伝わった寺—高山寺と明恵上人をめぐる美術—」

### ①明恵上人と高山寺の文化財

大槻 信（おおつき まこと） 京都大学大学院文学研究科教授

専門は日本語史。特に中古の古辞書。

北海道大学助手などを経て、2015年より現職。代表的な著書は『明恵上人資料第四』（高山寺資料叢書・第十八冊、築島裕・小林芳規他と共著、東京大学出版会、1998年）、『高山寺』（古寺巡礼・京都・32、小川千恵・阿川佐和子他と共著、淡交社、2009年）、「（観智院本類聚名義抄）解題」（新天理図書館善本叢書『類聚名義抄 観智院本』、八木書店、2018年）、『平安時代辞書論考 —辞書と材料—』（吉川弘文館、2019年）。

### ②明恵上人坐像の作者は誰か？—高山寺の彫刻と慶派仏師をめぐる—

皿井 舞（さらい まい） 東京国立博物館平常展調整室長

専門は日本彫刻史。

東京文化財研究所主任研究員、東京国立博物館主任研究員を経て、2019年より現職。「仁和寺と御室派のみほとけ—天平と真言密教の名宝—」（2018年）、「京都 大報恩寺 快慶・定慶のみほとけ」（2018年）、「出雲と大和」（2020年）等の特別展を担当。共著に『「かたち」再考』（平凡社、2014年）、『天皇の美術史1 古代国家と仏教美術』（吉川弘文館、2018年）ほか。

## 第2講「鳥獣戯画研究のこれまでとこれから」

### ③鳥獣戯画八〇〇年の生命誌—伝来と研究史をたどる—

土屋 貴裕（つちや たかひろ） 東京国立博物館特別展室主任研究員

専門は日本絵画史。特に古代中世のやまと絵、絵巻。

東京文化財研究所研究員を経て、2011年より東京国立博物館研究員。「鳥獣戯画—京都 高山寺の至宝」（2015年）、「国宝 鳥獣戯画のすべて」（2021年）等の特別展を担当。主な著作に、高山寺監修・土屋貴裕編『高山寺の美術』（吉川弘文館、2020年）、土屋貴裕・三戸信恵・板倉聖哲『もっと知りたい鳥獣戯画』（東京美術、2020年、共著）。

### ④鳥獣戯画「平成の修理」の成果と展望

朝賀 浩（あさか ひろし） 宮内庁長官官房参事官

専門は日本中世宗教絵画史。

大阪市立美術館主任学芸員、文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官、京都国立博物館学芸部長を経て2020年より現職。文化庁在職中に鳥獣戯画解体修理の指導監督を担当。代表的な著作は「国宝「鳥獣人物戯画」甲巻における現状変更（錯簡訂正）の検討について」（『鳥獣戯画 修理から見てきた世界—国宝 鳥獣人物戯画修理報告書』勉誠出版、2016年）。

### ⑤欧米がみた鳥獣戯画—近代における海外出品をめぐる—

鬼頭 智美（きとう さとみ） 東京国立博物館上席研究員(国際交流)

専門は博物館学。

広報室、国際交流室を経て 2019 年より現職（広報室長兼務）、博物館の国際交流事業および海外関係の企画調整業務にあたっている。「クリーブランド美術館展」（2014 年）、「マルセルデュシャンと日本美術」（2018 年）などを担当。著作物は、『海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究』（研究報告書、2017 年）、「海外日本古美術展に見る「日本」—国家ブランディングとの関わりと展覧会実施における諸問題」『東京国立博物館紀要第 46 号（2011 年）』、「古美術に近づく—応挙館で美術を体験するまで」『応挙館で美術体験の記録』（2010 年）など。

## 第 3 講「何が、どのように描かれているのか？—図様と表現の特質—」

### ⑥平安絵巻としての鳥獣戯画—ストーリー展開の妙味—

井並 林太郎（いなみ りんたろう） 京都国立博物館企画室研究員

専門は日本古代中世絵画史。

京都国立博物館美術室アソシエイトフェローを経て 2016 年より現職。特別展「流転 100 年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」（2019 年）を担当。論文に「遊行上人縁起絵の転写について—最古級断簡三図の検討を中心に—」（公益財団法人仏教美術研究上野記念財団研究報告書第 44 冊『研究発表と座談会 一遍聖絵と遊行上人縁起絵』、2020 年）、「後白河院政期の絵画制作と蓮華王院宝蔵—「治承三十六人歌合」を手がかりに—」（『美術フォーラム 21』42 号、2020 年）。

### ⑦白描画としての鳥獣戯画—線描の妙技—

古川 攝一（ふるかわ しょういち） 東京国立博物館絵画・彫刻室研究員

専門は仏教絵画史。

大和文華館学芸部を経て 2020 年より現職。大和文華館では「白描の美—図像・歌仙・物語—」（2017 年）などの特別展を担当。代表的な著書は、吉田豊共編『中国江南マニ教絵画研究』（臨川書店、2015 年）、論文は「院政期の白描画における図像の位置—やまと絵白描画との関わりをめぐる—」（『大和文華』135 号、2019 年）など。

### ⑧「鳥獣戯画」乙巻にみる宋画的要素

猪熊 兼樹（いのくま かねき） 東京国立博物館特別展室長

専門は工芸史。

九州国立博物館研究員、東京国立博物館研究員、文化庁文化財調査官を経て 2019 年より現職。近年は、東アジア（日本、中国、韓国、ベトナム、琉球）の宮廷文化に関する研究を行なっている。主要著書は『宮廷物質文化史』（中央公論美術出版、2017 年）、主要論文は「金剛寺蔵「野辺雀蒔絵手箱」の場景意匠に関する考察」（『仏教芸術』282 号、2005 年）、「春日大社蔵「沃懸地螺鈿毛抜形太刀」の意匠に関する考察」（『仏教芸術』266 号、2003 年）など。

## 第4講「誰が描いたのか？—絵師をめぐる議論—」

### ⑨宮廷絵師説の可能性—「伴大納言絵巻」との近さを視野に入れて—

五月女 晴恵（そうとめ はるえ） 北九州市立大学文学部教授

専門は日本中世絵巻史。

東京大学美術史学講座助教を経て2021年より現職。代表的な著書は『彦火々出見尊絵巻』の釣針を取り戻す場面の構図について—金剛山寺所蔵『矢田地蔵縁起絵』の授戒場面との類似は偶然か—

（『空間史学叢書 2 装飾の地層』岩田書院、2015年）、『土蜘蛛草紙絵巻』の描き手と制作時期について—聖衆来迎寺所蔵「六道絵」との近似性に着目しながら—（北九州市立大学特別研究推進費助成研究報告書、2020年）。

### ⑩絵仏師説の可能性—鳥羽僧正覚猷説と当時の寺院の社会性の観点から—

大原 嘉豊（おおはら よしとよ） 京都国立博物館保存修理指導室長

専門は日本・東洋仏教絵画史。

京都大学人文科学研究所助手を経て2006年より京都国立博物館研究員。「鑑真和上と戒律のあゆみ」

（2021年）、「文化財修理の最先端」（2020年）等の展覧会を担当。代表的な著作は、高山寺監修・石塚晴通編『高山寺の名宝 国宝 鳥獣人物戯画 全四巻』（解題、2015年）、「国宝 明恵上人像（樹上坐禅像）を巡る一試論」（『学叢』41号、2019年）など。

## 第5講「何のために描かれたのか？—主題と制作背景を探る—」

### ⑪正倉院宝物と鳥獣戯画

増記 隆介（ますき りゅうすけ） 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

専門は仏教絵画史。

大和文華館学芸部、文化庁美術学芸課文化財調査官（絵画部門・古墳壁画室）、神戸大学人文学研究科准教授を経て2021年より現職。代表的な著書は、『院政期仏画と唐宋絵画』（中央公論美術出版、2015年）、『天皇の美術史 1 古代国家と仏教美術』（吉川弘文館、2018年）など。

### ⑫鳥獣戯画の主題解釈は可能か？

三戸 信恵（みと のぶえ） 山種美術館特任研究員

専門は日本絵画史。

サントリー美術館学芸員、山種美術館特別研究員を経て、2020年より現職。主な著書は『かわいい琳派』（東京美術、2014年）、『古寺巡礼 京都 32 高山寺』（淡交社、2009年、共著）、『色から読み解く日本画』（エクスナレッジ、2018年）、土屋貴裕・三戸信恵・板倉聖哲『もっと知りたい鳥獣戯画』（東京美術、2020年、共著）。

## 第1講「鳥獣戯画の伝わった寺—高山寺と明恵上人をめぐる美術—」

## ①明恵上人と高山寺の文化財

京都大学大学院文学研究科教授  
大槻信

●高山寺には国の指定文化財として、国宝8件、重要文化財50余件がある。

## ■1. 明恵上人

## ●明恵

明恵は承安三年(1173)に生まれ、寛喜四年(1232)に没した。八歳で父母をあいついで失い、おじの上覚がいた高雄山神護寺に入る。仁和寺で真言、東大寺で華嚴を学び、勧修寺の興然からは密教の伝授を受けた。建永元年(1206)後鳥羽院より神護寺の別院であった梅尾の地を賜り、高山寺を開く。

明恵といえば、厳しい修学修行、釈迦への思慕、自然との調和、人間味あふれる逸話、夢幻に彩られた伝説、書き留められた夢などが想起される。幼くして父母を失った明恵は、生涯、釈迦を父、仏眼仏母を母として慕った。若き日には、求道捨身の思いから仏眼像の前で右耳を切り落とし(二十四歳)、釈尊への恋慕から二度にわたって印度行きを企んだ。直情径行。純粹と熱情にあふれた「潔く気高く優しい」僧侶であった。残された和歌も自在な境地を伝える。

## ●仏眼仏母像(国宝)(高山寺蔵)

「无耳法師之母御前也」

「もろともにあはれとおぼせわ仏よきみよりほかにしる人もなし」(原文片仮名)

## ●伝記・伝説・和歌

○伝記 『明恵上人行状』『明恵上人伝記』など。

○伝説 『古今著聞集』『沙石集』『徒然草』など。

○『古今著聞集』高辨上人例人に非ざる事並びに春日大明神上人の渡天を留め給ふ事  
(本文引用略)

○『梅尾明恵上人伝記』(『明恵上人資料第一』: 453-454)

「文学(文覚)上人、常に逢て申されけるは、在世、舍利弗目連等の證果の聖者、其徳よろづ申に不及、然に心の仏法にをきては、いさぎよく、けだかく、やさしきは明恵房の心にすぎたるはましまさじ。」

○『明恵上人歌集』152

あかあかやあかあかあかやあかあかや あかあかあかやあかあかや月

## ■2. 高山寺の文化財

### ●国宝・重要文化財（＊は本特別展出品）

○国宝 8件（絵画4、書跡3、建造物1）

仏眼仏母像、明恵上人樹上坐禅像、華嚴宗祖師絵伝＊、鳥獣人物戯画＊、冥報記、玉篇卷第二十七、篆隸万象名義、石水院

○重要文化財 52件（絵画10、彫刻7、工芸品3、書跡28、文書2、建造物2）

大唐天竺里程書＊、夢記＊、高山寺典籍文書類（9293点）……

○高山寺経蔵は「中世の巨大総合図書館」であった。

### ●整理・目録

○鎌倉時代建長年間 『高山寺聖教目録』『高山寺経蔵聖教内真言書目録』

○江戸時代寛永年間 仁和寺覚深法親王（後南御室、1588-1648）・顕証（1597-1678）

### ●高山寺は学問寺である。

### ●高山寺の典籍 継承される学問寺

修学につとめた明恵と高弟たち、さらにはそれを庇護する者たちによって、高山寺には膨大な数の典籍が収集され、高山寺経蔵は国内有数の巨大図書館として機能していた。

典籍の現存総数はおよそ11500点。そのうち平安時代の書写にかかるものが2500点、鎌倉時代が6000点、室町・江戸時代が3000点と概算される。明恵と高弟たちに関係する鎌倉時代の典籍が経蔵の中心であることは数によっても明らかである。室町・江戸時代には、転写、修理、目録作成などによって、典籍類を後に伝えた。このような経蔵護持のための努力と学問の継続があればこそ、多くの典籍は今に伝えられた。その努力は現在も続いている。

八百年という時間の中では、残らないのがむしろ普通といってよい。兵禍、火事、洪水、政治変動、価値観の変化などにより滅び、散逸する危険性は常にあった。中でも文明、天文年間の戦火は伽藍をほとんど焼亡せしめたという。往時の建物は石水院以外一つも残らない。多くあった子院（塔頭）も跡形なく消えた。そのような中、寺宝がこれだけまとまって伝えられていることの方が奇跡である。典籍・美術品に代表される寺宝は、明恵に対する崇敬を核として、営々と護持されたからこそ現在に残っているのである。

○高山寺典籍文書総合調査団（昭和四十三年結成）

## ■3. おわりに 鳥獣戯画

### ●鳥獣戯画の謎

鳥獣戯画について、明恵との直接の関わりを確かめることはできない。

古い目録類に見えず、高山寺における伝来の記録は16世紀を遡れない。

「明恵の寺」の求心力。

## 第1講「鳥獣戯画の伝わった寺—高山寺と明恵上人をめぐる美術—」

## ②明恵上人坐像の作者は誰か？—高山寺の彫刻と慶派仏師をめぐる—

東京国立博物館平常展調整室長  
皿井舞

## ◎明恵上人(1173～1232)

紀州国在田(現在の和歌山県有田川町)生まれ。幼くして両親と死別した後、仏道に入り、生涯をかけて厳しい修学に専心した鎌倉時代の高僧。

## [明恵上人の略歴]

|                |                                                                                                                   |
|----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1173年(承安3)     | 紀州国在田に生まれる。                                                                                                       |
| 1180年(治承4) 8歳  | 1月に母、9月に父と相次いで死別する。                                                                                               |
| 1181年(文治1) 9歳  | 叔父の上覚をたよって、京都の神護寺に入る。                                                                                             |
| 1188年(文治4) 16歳 | 東大寺の戒壇院にて具足戒を受ける。                                                                                                 |
| 1191年(建久2) 19歳 | この年以降、約40年間にわたって「夢記」をつける。                                                                                         |
| 1195年(建久6) 23歳 | 神護寺を離れて、故郷の紀州(白峰)へ移る。                                                                                             |
| 1196年(建久7) 24歳 | 母と慕っていた「仏眼仏母像」の前で右耳を切る。                                                                                           |
| 1201年(建仁2) 30歳 | 天竺(インド)に渡航する計画を立てるが、翌年、春日明神の託宣によって渡航を断念する。                                                                        |
| 1205年(元久2) 33歳 | 再び、天竺渡航を計画するが、くじにより中止。                                                                                            |
| 1206年(建永1) 34歳 | 後鳥羽院から梶尾の土地を与えられ、高山寺を中興する。                                                                                        |
| 1215年(建保3) 43歳 | 「四座講式」を執筆し、高山寺の恒例となる涅槃会を始行。                                                                                       |
| 1219年(承久1) 47歳 | 督三位局を願主として高山寺金堂が整備され、快慶作の釈迦如来像が安置、開眼供養される。                                                                        |
| 1223年(貞応2) 48歳 | 高山寺金堂に運慶作の毘盧遮那仏像等を安置する。快慶作の釈迦如来像は1221年(承久3)に賀茂別所に移されていた。                                                          |
| 1225年(嘉祿1) 53歳 | 上賀茂神主の賀茂能久が明恵に寄進した仏光山の禅堂を高山寺に移し、羅漢堂とする。高山寺鎮守社を建立し、白光神・善妙神像が奉納される。                                                 |
| 1227年(安貞1) 55歳 | 覚徹の沙汰により、三重塔を上棟する。寛喜年間に完成。<br>湛慶作の中尊毘盧遮那仏ほか文殊・普賢・観音・弥勒の五聖像が安置される。仏後壁の正面には、金剛薩埵を中心に欲・触・愛・慢の四菩薩を配置した「五秘密曼荼羅図」が描かれる。 |
| 1229年(安貞3) 57歳 | 仁王門建立。湛慶作の金剛力士像を安置する。                                                                                             |
| 1232年(貞永1) 60歳 | 1月19日、入滅。                                                                                                         |

## ◎明恵上人坐像

像高 81.8 cm 木造、彩色 玉眼 鎌倉時代・13 世紀

現在、高山寺開山堂（江戸時代・1723 年〈享保 8〉。明恵が晩年を過ごし、臨終の場所となった禅堂院の跡地に立つ）に安置される。普段は非公開。28 年ぶりの展覧会ご出展。

## ◎高山寺堂宇と安置諸像

| 堂 宇  | 安置尊像                                             | 作 者                                          |                                                                                         |
|------|--------------------------------------------------|----------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 金堂   | 盧遮那如来<br>持国天<br>増長天<br>広目天<br>多聞天<br>観音菩薩<br>弥勒  | 運慶<br>円慶（改名運覚）<br>湛慶<br>康運（改名定慶）<br>康海（改名康勝） | 貞応 2 年（1223）4 月 8 日、運慶の私堂である地蔵十輪院から高山寺金堂に移す。                                            |
| 三重塔  | 毘盧遮那仏<br>文殊<br>普賢<br>観音<br>弥勒                    | 湛慶<br>定慶<br><br>湛慶                           | 嘉禄 3 年（1227）8 月 29 日に上棟、寛喜年中（1229~32）に完成した。明恵の亡くなる貞永元年（1232）1 月 19 日より前に急いで行遍が開眼供養を行った。 |
| 羅漢堂  | 賓頭盧尊者<br>比丘形文殊                                   | 運慶<br>湛慶                                     | 賀茂能久が造進した禅堂を移築。<br>賓頭盧尊者は、嘉禄元年（1225）7 月 14 日に羅漢堂より、移す。<br>比丘形文殊は羅漢堂建立の時に造立する。           |
| 西経蔵  | 大日如来                                             |                                              |                                                                                         |
| 鎮守社  | 大白光、善妙神、<br>獅子・狛犬                                |                                              | 嘉禄元年（1225）8 月 16 日、白光・善妙神奉納（春日神は、勧請するが御像は安置せず）                                          |
| 大門   | 金剛力士                                             | 湛慶                                           | 安貞 3 年（1229）建立                                                                          |
| 十三重塔 | 弥勒菩薩<br><br>脇侍 制多迦、<br>梵天、帝釈天、<br>毘沙門天<br>六寸千体釈迦 | 快慶<br><br>湛慶                                 | 嘉禎 2 年（1236）、覚厳法眼により十三重塔建立。上人年来の本尊である弥勒菩薩像を安置するため。<br><br>嘉禎 3 年（1237）正月 18 日、行遍、開眼供養。  |
| 渡廊   | 上人真影木像                                           |                                              |                                                                                         |

（発表者作成）

## 第2講「鳥獣戯画研究のこれまでとこれから」

## ③鳥獣戯画八〇〇年の生命誌—伝来と研究史をたどる—

東京国立博物館特別展室主任研究員  
土屋貴裕

## はじめに—鳥獣戯画の基礎知識—

- 国宝 全四巻（甲・乙・丙・丁巻）**。京都・高山寺蔵。平安から鎌倉時代に段階的に描かれる。
  - ・甲巻（No.1）：縦31.1 横1156.6。擬人化された動物たちを描く。前半、後半で筆者が異なる。
  - ・乙巻（No.2）：縦31.1 横1224.5。動物図鑑のような巻。前半は日本動物編、後半は異国動物・霊獣編。
  - ・丙巻（No.3）：縦31.9 横1113.1。もとは料紙の表裏に描かれていた人物戯画と動物戯画。
  - ・丁巻（No.4）：縦31.7 横938.6。人物中心の巻。先行巻のモチーフを継承。
- 断簡** 鳥獣戯画から分かれて掛軸になっている作品。甲巻断簡4点、丁巻断簡1点が確認されている。
  - ・東博本（No.6）：もとは甲巻第16紙の前に位置していた。
  - ・益田家旧蔵本（No.7）、高松家旧蔵本（No.8）、MIHO MUSEUM本（No.9）：甲巻の別巻から分かれる。
  - ・MIHO MUSEUM本〈丁巻〉（No.10）：甲巻以外の唯一の断簡。丁巻より早くから分かれる。
- 模本** かつての鳥獣戯画の姿を写す。失われた場面、錯簡（絵の順序の入れ替わり）などが分かる。
  - ・長尾家旧蔵本（No.11）：甲巻後半錯簡前の姿を写す。囲碁、腕相撲、首引き、高飛びは現存しない図。
  - ・住吉家旧蔵本（No.12～16）：5巻。巻1～4は甲丙丁巻の写し。巻5は甲巻断簡分断前の姿を写す。
  - ・探幽縮図（No.17）：狩野探幽筆。住吉家旧蔵模本巻5、東博本断簡、長尾家本の画面を写す。
  - ・松浦家本（No.18）：平戸藩主松浦静山、福山藩主阿部正精所蔵の益田家旧蔵本、高松家旧蔵本を写す。

## 1. 中世の鳥獣戯画

## ●中世から近世初頭の鳥獣戯画に関する記録

- ・建長5年（1253）「秘蔵々々絵本也 拾四枚也 建長五年五月 日 竹丸（花押）」（丙巻奥書）
- ・永正16年（1519）「一 上人ノ御絵（上中下以上三巻） 箱一二入／一 義湘元暁ノ絵取合テ六巻 箱一二入／一 シヤレ絵三巻 箱一二入／弁助（永正文書。『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』）」
- ・天文16年（1547）細川晴元、高雄城の細川国慶を攻め、高山寺の十三重塔、僧坊など悉く焼失。
- ・元亀1年（1570）「華嚴宗祖師義湘大師絵四巻\*明恵上人絵三巻\*元暁大師絵二巻\*以上九巻\*獣物絵上中下同類巻\*二巻\*（開田殿口口本）都合十一巻本是高山寺東経蔵之具也先年兵乱之時足輕共執散為彼兵火所々焼失了（中略）元亀庚午七月廿一日羊僧齋怡（花押）」（元亀文書）。巻\*は「巻」の異体字。  
⇒明恵上人絵、義湘絵、元暁絵、鳥獣戯画が一体のものとして扱われている点に注意
- ・寛永10年（1633）「義湘大師絵四巻（朱）不足 今度調三巻了重可調本様／元暁大師絵二巻（上下）／絵本一結（朱）七十二枚也 内小切在之」（『笛入子六合目録』）」
- 鳥獣戯画はいつから高山寺にあったのか？ それまではどこにあったのか？
  - ・元亀文書の開田殿＝仁和寺第10世法助（1227～84）。九条道家第5子。高山寺に観海院を開く。

- ・元亀文書を記した斎怡＝仁和寺心蓮院出身。高山寺観海院住僧。
- ・元和2年(1616) 菊淵、俊怡が華嚴宗祖師絵伝を「改定」。菊淵は「十無尽院主観海院斎怡僧都法資」

### ●室町時代後期における高山寺寺宝の罹災→断簡の流出

- ・鳥獣戯画、華嚴宗祖師絵伝 (No.39、40) の損傷痕
- ・「此画卷 (華嚴宗祖師絵伝のこと) ハ一部八巻タリシガ元亀年間土一揆ノ乱妨ニ羅リ什宝類多ク盗マレシガ中仁和寺ノ辺ニ捨置タリシヲ取集メシガ遂ニ三巻ハ其所在ヲ失セシ旨方便知院菊淵上人ノ手記ニアルヲ見ル」(明治25年刊西村兼文『続群書一覧』) →元亀年間の土一揆と「先年兵乱之時」。

## 2. 近世の鳥獣戯画

### ●東福門院の修理(慶安3年(1650)～延宝6年(1678)頃)と四巻構成の確立

- ・「先日持為持被下候され絵四巻、義湘大師縁起四巻、元暁大縁起二巻御覧被遊候処ニ(中略)巻物共損申候、修覆御望無之候哉」(「三宅玄蕃書状」) →鳥獣戯画旧箱墨書「東福門院御修補」
- ・宝暦10年(1760)「鳥羽絵紙数之覚」→現状の紙数と一致

### ●鳥羽僧正覚猷筆説の形成過程

- ・17世紀前半:「土佐筆」(探幽縮図 (No.17)、鳥獣戯画模本(狩野右京鑑定本。東博蔵))
- ・18世紀半ば以降:「鳥羽絵」(宝暦10年「鳥羽絵紙数之覚」)、「鳥羽僧正筆絵巻物」(寛政4年(1792)『寺社宝物展覧目録』)、「僧覚融画藁」「僧覚融戯画」(寛政6年(1794)『好古小録』)

## 3. 近代の鳥獣戯画

### ●展覧機会の拡大と旧国宝指定

- ・明治5年(1872) 壬申検査。「鳥羽僧正筆画卷物 四本」(蜷川式胤『奈良之筋道』)。
- ・明治7年(1874) 5月、湯島聖堂大成殿で昌平坂書画展開催。「鳥羽僧正画卷 四巻」出品。
- ・明治14年(1881) 9月、文部省博物館による「修繕」(旧箱墨書「明治十四年九月／修繕ヲ加」)。
- ・同年4月、高山寺大火に遭う→明治17年(1884) 売却の可否を京都府庁に伺い。
- ・明治32年(1899)「紙本水墨戯画 伝僧覚猷筆 四巻」として国宝(旧国宝)指定。

### ●鳥獣戯画という名称の確定と「漫画の元祖」

- ・明治32年(1899)『真美大観』第一巻で「鳥獣戯画紙本墨色 鳥羽僧正覚猷筆」
- ・明治35年(1902)『京都帝室博物館列品第一回目録』に「鳥獣戯画 紙本墨画 寺伝僧覚猷筆 四巻」
- ・大正13年(1924) 細木原青起『日本漫画史』「先づ日本の漫画家の嚆矢は彼の鳥羽僧正である」
- ・昭和6年(1931)『日本絵巻物集成』第17巻「鳥獣人物画卷」(雄山閣)、甲乙丙丁巻の名称の初見か。
- ・昭和27年(1952) 3月、「紙本墨画 鳥獣人物戯画 四巻」として国宝指定。

## おわりに―鳥獣戯画の現在―

### ●今日の鳥獣戯画のあり様は、制作から800年来のさまざまな蓄積の上に成り立つ

- ・「鳥羽絵」「覚猷筆」「漫画の元祖」「風刺」「戯画」「甲乙丙丁の序列」⇒すべて後付けの価値観

### ●謎多き鳥獣戯画の「本当の姿」を見つけることはできるのか?

- ・ブレイクスルーとしての「平成の修理」→丙巻の制作年代の再検討

⇒表現や図様の特質、絵師の問題、主題や制作背景の問題を、本連続講座を通じて改めて考える。

## 第2講「鳥獣戯画研究のこれまでとこれから」

### ④鳥獣戯画 「平成の修理」の成果と展望

---

宮内庁長官官房参事官  
朝賀浩

#### 1. 国宝 鳥獣人物戯画 平成の本格修理

#### 2. 修理によって得られた新知見

甲巻

乙巻

丙巻

丁巻

3. 料紙の紙継ぎと切断

4. 料紙の相剥ぎ

5. 修理による知見と、本作に関する過去の記録の記述

6. 本作の寺宝としての価値づけの変遷

7. 修理を完了した本作の今後の研究に期待されること

## 第2講「鳥獣戯画研究のこれまでとこれから」

## ⑤欧米がみた鳥獣戯画—近代における海外出品をめぐって—

東京国立博物館上席研究員(国際交流)

鬼頭智美

## 明治以降、日本国外で開催された展覧会における鳥獣戯画の主な出品歴

1900 パリ万国国際博覧会(パリ万博)(1900年4月14日～11月12日)万博日本館

万博会場内の別棟(トロカデロ地区)で「古美術展」を開催。国外に向けて初めて国として日本の美術史を示す中に「藤原時代」のやまと絵の代表作の一つとして高山寺蔵「戯画」1巻(現・丙巻?)を出品。

1910 日英博覧会(1910年5月14日～同年10月29日)ロンドン市内

日英同盟の下、英国との関係強化のため開催した博覧会場で日本の美術史を概観する中に高山寺蔵「戯画」1巻を出品した。

1936 ボストン日本古美術展(1936年9月11日～10月25日)ボストン美術館

ハーバード大学300周年記念事業として開催。日本画卷の最高峰の一つとして東博蔵の断巻が出品され、日本から貸し出された貴重な作品ということでも注目となった。

1949 日本古美術展(1949年11月9日～12月4日)シアトル美術館

GHQ/SCAPの民間情報教育局美術記念物課で美術顧問官であったシャーマン・リー企画で開催。東博蔵の残欠の出品は彼自身が選定。解説では「力強い線と器用な筆遣いが特徴」とされる。

1953 米国巡回日本古美術展(1953年1月～12月)全米5都市を巡回

日本美術史の概要を示す、国宝・重文を含む91件を日本から貸与して開催。米国ワシントンDC、ニューヨーク、シカゴ、シアトル、ボストンで巡回開催、5会場計40万人の来館者を集めた。

高山寺蔵の甲巻が出品され、ポスター等で画像が使用され目玉作品の一つとなるなど注目された。

1958-9 欧州巡回日本古美術展覧会(1958年4月～1959年2月)欧州4か国を巡回

特に絵画と彫刻作品に絞って出品してほしいとの要望で、絵画65件、彫刻27件を出品、日本美術を名品で概観する内容とした。高山寺蔵の丙巻および東博の断巻が出品された。

1965-6 米・加巡回日本古美術展覧会(1965年9月～1966年4月)米国とカナダの4都市を巡回

1953年の米国巡回展と同様の内容で絵画・書跡・彫刻・工芸作品を128件出陳した。米国ロサンゼルス、フィラデルフィア、デトロイトおよびカナダのトロントを巡回開催、4会場で20万人を超える来場者があった。高山寺蔵の丙巻1巻が出品された。

いずれの場合も、日本の中世に描かれた画卷の代表作として出品され、のびやかな筆致、画題の自由さが好まれたとされる。

●鳥獣人物戯画卷(断簡を含む)海外出品歴一覧

| 年         | 場所                                                                         | 展覧会名など       | 員数  | 種別      | 備考          |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------|--------------|-----|---------|-------------|
| 1900      | フランス・パリ                                                                    | パリ万博         | 1 巻 | 丙巻?     |             |
| 1910      | イギリス・ロンドン                                                                  | 日英博覧会        | 1 巻 | ?       | 3 巻のうちの 1 巻 |
| 1936      | アメリカ・ボストン美術館                                                               | ボストン日本古美術展覧会 | 1 幅 | 断巻      | 東博本         |
| 1949      | アメリカ・シアトル美術館                                                               | 日本古美術展       | 1 幅 | 断巻      | 東博本         |
| 1953      | アメリカ・ナショナルギャラリー (DC)、メトロポリタン美術館 (NY)、シアトル美術館、シカゴ美術館、ボストン美術館                | 米国巡回日本古美術展覧会 | 1 巻 | 甲巻      |             |
| 1954      | フランス・パリ チェルヌスキ美術館                                                          | ルネ・グルッセ氏追悼展  | 1 幅 | 断巻      | 東博本         |
| 1955      | アメリカ・ホノルル美術館                                                               | 日本美術名品展 絵画   | 1 幅 | 断巻      | 東博本         |
| 1958-1959 | フランス・国立近代美術館 (パリ)、イギリス・ヴィクトリアアンドアルバート美術館 (ロンドン)、オランダ・ハーグ市立美術館、イタリア・ローマ展示宮殿 | 欧州巡回日本古美術展覧会 | 1 巻 | 丙巻および断巻 | 東博本         |
| 1965-1966 | アメリカ・ロサンゼルスカウンティ美術館、デトロイト美術館、フィラデルフィア美術館、カナダ・トロント美術館                       | 米・加巡回日本古美術展  | 1 巻 | 丙巻      |             |

## 第3講「何が、どのように描かれているのか？—図様と表現の特質—」

## ⑥平安絵巻としての鳥獣戯画—ストーリー展開の妙味—

京都国立博物館企画室研究員  
井並林太郎

## 1. 鳥獣戯画の料紙と制作工程

「四巻の料紙は寺院における文書・聖教科紙として用いられた範疇の杉原紙であり、時代的にも十二世紀末から十四世紀の中世前期に収まるものと判断できる。」

(湯山賢一「鳥獣人物戯画」の料紙について『鳥獣戯画 修理から見てきた世界 国宝 鳥獣人物戯画修理報告書』勉誠出版、2016年)

「しかるべき施主が事業を企て、注文制作される以外に、絵を好む人々が生活の場で絵を描いて楽しむことはしばしば行われたであろう。(略)それらは後世にのこすために描かれたものではないので、楽しまれた後はその役割を終え、反故紙となって再利用され、或いは漉き返し等されて、消えていったと思われる。そうした、いわば手すさびの絵、換言すれば、後世に遺すことが目的でない消耗品としての絵には、高価な加工料紙ではなく、身近にある文書用の紙や加工されていない紙が用いられたと推測するのである。」

(鬼原俊枝「国宝「鳥獣人物戯画」の保存修理——文化財保存、及び美術史的観点から」『同上』)

## 2. 甲巻の場面構成

- ・横長の画面が繋がるという絵巻特有の形態を活かし、三紙以上にわたって場面展開が連続する
- ・左から右へ進行する動物たち(絵巻の展開・視線の動きに逆行)

## (1)「信貴山縁起絵巻」(平安時代・12世紀、朝護孫子寺蔵)

朝護孫子寺中興である命蓮上人の霊驗譚を描く絵巻

## (2)「伴大納言絵巻」(平安時代・12世紀、出光美術館蔵)

応天門の変をめぐる伴善男の陰謀と失脚を描く絵巻

## (3)『今昔物語』巻第二十八「比叡山無動寺義清阿闍梨鳴呼絵語第三十六」

「其レニ此ノ阿闍梨ハ、鳴呼絵ハ筆ツキハ□□ニ書ケドモ、其レハ皆鳴呼絵ノ気色無シ。此ノ阿闍梨ノ書タルハ、筆墓無ク立タル様ナレドモ、只一筆ニ書タルニ、心地ノ艶ズ見ユルハ、可咲事無限シ。然レドモ更ニ□□ニテハ不書ズ。態ト紙継テ、書スル人有レバ、只物一ツ許ヲゾ書ケル。亦人書セケレバ端ニ弓射タル人ノ形ヲ書テ、奥ノ畢ニ的ヲナム書タリケル。中ニハ箭ノ行ク形ト思シクテ、墨ヲナム細ク引渡シタリケル。然レバ書スル人ハ『不書ジ』トハ不云ズシテ、紙ニ墨ヲ引渡シタレバ、異物モ否不書マジ」トテゾ、極ク腹立ケル。然レドモ事ニモ不為デゾ有ケル。」『日本古典文学全集』(小学館)

- (4)「年中行事絵巻」(原本は平安時代・12世紀)  
平安時代の宮廷の儀式や民間の風俗を描く絵巻

- (5)「北野天神縁起絵巻」(鎌倉時代・13世紀)  
菅原道真の生涯と北野天満宮の縁起を描く絵巻

### 3. 乙巻・丙巻・丁巻の場面構成

- ・多くは一〜二紙程度に事物・事件を収め、これらを羅列的に配置する
- ・展開に際して連続性を保つよう背景や人物の向きを工夫

- (1)「舞楽散楽図(信西古楽図)」(室町時代・宝徳元年(1449)、陽明文庫蔵)  
古代の楽器演奏・唐舞・散楽・雑戯を描く白描の図巻  
奥書「<sup>本云</sup>三條宮畫 御室繪／舞銘 當今宸筆／宝徳元年九月 日」

信西(藤原通憲、1106〜1159)…後白河天皇の側近  
三條宮(以仁王、1151〜1180)…後白河天皇の第三皇子

- (2)「放屁合戦絵巻」(室町時代・文安六年(1449)、サントリー美術館蔵)  
法師たちの放屁競べを描く絵巻  
奥書「定智筆 御室繪本写之／文安六年五月 日」

定智…12世紀の絵仏師 鳥羽僧正覚猷と密教図像収集をおこなう

奥書の推定筆者  
後崇光院(貞成親王、1372〜1456)…後花園天皇の父 『看聞日記』  
「舞楽散楽図」奥書も同筆か

⇒主題や人物の描き方、画面構成に共通点がある《舞楽散楽図》や《放屁合戦絵巻》が仁和寺に伝来したことは、鳥獸戯画制作の手がかりになるか？

守覚法親王(1150〜1202)…後白河天皇の第二皇子 仁和寺御室

- (3)「勝絵」(室町時代・15世紀、三井記念美術館蔵)  
陽物比べと放屁合戦を描く絵巻  
奥書「絵師鳥羽覚猷僧正／真筆詞者醍醐成賢／僧正手跡也既五代相伝／尤以為重宝哉」

成賢(1162〜1231)…真言僧、藤原成範の子

- (4)「労度叉闍聖変相図」(フランス国立図書館蔵)

## 第3講「何が、どのように描かれているのか？—図様と表現の特質—」

## ⑦白描画としての鳥獣戯画—線描の妙技—

東京国立博物館絵画・彫刻室研究員  
古川 攝一

## はじめに—白描画とは？—

○白描画：墨の輪郭線を表現の主体とした絵画。墨の濃淡、滲み、かすれ、面の広がりを使用した水墨画とは異なる。中国では唐・北宋時代頃には「白画」、元時代以降は「白描画」と呼ばれ、日本では、奈良時代以降、「白絵」「墨絵」「素画」などと呼ばれる。ただ、水墨画が本格的に入ってきて以降は、「墨絵」は水墨画を指すことが多い。

○白描画の表現の「要（かなめ）」：描線。描線からどれほどの情報が得られるか。

→線の太さ、最初に筆を入れる部分の形、止めや払いの形、濃淡、筆致の速さなど。さらには、こうした特徴を描き手が意識しているのかも重要。

→白描画の描線：描き手の技量や鑑賞者の美意識、価値観が素直に表れる。

○講座の目的：線描の妙技を味わえる「鳥獣戯画」。表現の要である描線や描き方に注目することで、ほかの白描画との比較検討を行い、制作に関わった人々について考える。

## 1. 白描図像の描線：多種多様

- ・「高僧図像」観祐筆、長寛元年（1163）、仁和寺・大東急記念文庫
- ・「般若十六善神図像」三川君筆、長寛三年（1165）、個人
- ・「先徳図像」玄証筆、文治二年（1186）以降、東京国立博物館
- ・「千手観音二十八部衆図像」鎌倉時代、東京国立博物館

## 2. やまと絵白描画の描線：均質、繊細、打ち込み・払いの痕跡・墨継ぎ残さない、没個性的、抑制的

- ・「隆房卿艶詞絵巻」鎌倉時代、国立歴史民俗博物館
- ・「源氏物語絵詞」鎌倉時代、徳川美術館
- ・「源氏物語浮舟帖」鎌倉時代、大和文華館
- ・「延喜帝（時代不同歌合絵・白描上疊本）」鎌倉時代、個人

## 3. 「鳥獣戯画」乙巻と平安—鎌倉時代の白描画に描かれた「馬」比べ

## 【図像】

- ・「十二神将図像」平安時代、仁和寺・醍醐寺
- ・「梵天火羅九曜図」文治五年（1189）高山寺
- ・「十五鬼神図巻」鎌倉時代、大和文華館

#### 【やまと絵白描画】

- ・「源氏物語絵詞」鎌倉時代、徳川美術館
- ・「隨身庭騎絵巻」鎌倉時代、大倉集古館

○馬の描き方には一定の規範が認められる

→顔の輪郭の作り方、脚部の描き方、胸部分に記された「Y」字型の線。

○馬の描写においても、やまと絵白描画の描線は一定で抑制された、没個性的なもの。

→このような描線で描くことが求められる。

→宮廷絵師が描くに際して、描線には一定の規範／規制があった？

#### 4. 描線への美意識・描線の選択

##### 【王朝物語を描く】

- ・「源氏物語絵巻」平安時代、徳川美術館・五島美術館

##### 【経典の内容を描く】

- ・「華嚴五十五所絵巻」平安—鎌倉時代、東大寺ほか

##### 【寺社の縁起を描く】

- ・「信貴山縁起絵巻」平安時代、朝護孫子寺

##### 【高僧の伝記を描く】

- ・「華嚴宗祖師絵伝」鎌倉時代、高山寺

##### 【過去の歴史的イベントを描く】

- ・「伴大納言絵巻」平安時代、出光美術館

##### 【人々と病のかかわりを描く】

- ・「病草紙」平安時代、京都国立博物館ほか

##### 【貴族の姿を描く】

- ・「公家列影図」鎌倉時代、京都国立博物館

##### 【ほとけを描く】

- ・「普賢菩薩像」平安時代、東京国立博物館

○画題によって相応しい描線の選択が行われる。

→描線には意味があり、描線への美意識がうかがえる。

→鑑賞者・発注者の意向と描き手の意向。

#### おわりに

◎「鳥獣戯画」を生み出した人々はどのような人たちか？

① 発注者（場所）：仁和寺説が提起される

② 鑑賞者：「竹丸」が手掛かり？→「主題」は何か？

③ 描き手：描線から推測できること

④ 制作時期：「甲」「乙」「丙」「丁」の比較

⑤ 料紙：修理によって明らかとなったこと

## 第3講「何が、どのように描かれているのか？—図様と表現の特質—」

### ⑧「鳥獣戯画」乙巻にみる宋画的要素

東京国立博物館特別展室長  
猪熊兼樹

#### 【宋画に取材した工芸意匠】

春日大社蔵「猫雀金地螺鈿毛抜形太刀」 捕雀猫図  
金剛寺蔵 「野辺雀蒔絵手箱」 親子雀図

#### 【「鳥獣戯画」乙巻に描かれる鳥獣】

高山寺蔵 「鳥獣戯画」乙巻

- ・前半は日常的な鳥獣、後半は異国的あるいは空想的な動物
- ・鑑賞者を意識していないような構成

#### 【唐から宋への美術表現の変化】

- ・自然を捉える視力が鋭く向上
- ・唐代美術の鳥獣はポーズしたような図様、宋代美術の鳥獣は動作の一瞬を捉えた図様
- ・宋代美術では、鳥獣の動作だけでなく、羽毛の質感や色調も写生的に発達



「鳥獣戯画」乙巻 牛図

## 第4講「誰が描いたのか？—絵師をめぐる議論—」

### ⑨宮廷絵師説の可能性—「伴大納言絵巻」との近さを視野に入れて—

北九州市立大学文学部教授  
五月女晴恵

京都・高山寺所蔵「鳥獣人物戯画」甲・乙巻 国宝 紙本墨画 12世紀後半

<宮廷絵師説（絵仏師ではない可能性）を唱えた主な先行研究>

- ・山口蓬春「鳥獣戯画卷の描法について」（『日本絵巻物全集 第3巻 鳥獣戯画』角川書店 1959年8月）...「大和絵線描筆として特異性のある『削用筆』に類するものを使用。「生紙」を選んだことは「題材に対する並々ならぬ筆者の心くばりと周到な用意」
- ・浜田隆『日本の美術 第55号 図像』至文堂 1970年12月  
...「白描図像の細密な描線と根本的に異なる」「絵師系統であることはほぼ疑いない」
- ・上野憲示「『鳥獣戯画』甲巻系の復原」（『新修日本絵巻物全集 第4巻 鳥獣戯画』角川書店 1976年1月）...「年中行事絵巻」を描いた宮廷絵師・常磐源二光長たちが、甲・乙巻の図様を利用できる環境にあった。甲・乙巻は「専門絵師の描いたもの」
- ・上野憲示「『鳥獣人物戯画』の復原と観照」（『日本絵巻大成 6 鳥獣人物戯画』中央公論社 1977年8月）...上記上野氏論文で指摘した理由+群を抜く線描のテクニック+線描の美しさ+優れた画面展開+内山永久寺真言堂障子絵（※）と共通性の高い描写（懸崖・樹木・水流など）から、「一流の宮廷絵師の作品」

◎拙稿「『鳥獣人物戯画』甲・乙巻の筆者問題について—宮廷絵師制作の可能性をめぐる—」（『仏教芸術』266号 2003年1月）。

※藤田美術館所蔵「密教両部大経感得図」全二幅（もと大和国内山永久寺真言堂障子絵）

重要文化財 絹本着色 保延二年（1136） 宮廷絵師・藤原宗弘

\*『内山永久寺置文』（文保元年<1317>奥書）に「東西障子絵」は「藤三宗広」（=藤原宗弘）が描いたとある。

※出光美術館所蔵「真言八祖行状図」全八幅（もと大和国内山永久寺真言堂障子絵）

国宝 絹本着色 保延二年頃 宮廷絵師・藤原宗弘周辺

- ・凹凸のある岩肌を、筆の腹を使った粗いタッチと軽い線との併用によって描き出しており、特に「金剛智図」には、甲巻巻頭の懸崖や乙巻の豹や獐のいる崖と良く似たものが見出せる。「龍智図」下端に見える波紋の微妙な動きを「穂先のきいたのびやかな筆使い」で表現する点は、甲巻巻頭の水波の線を想起させる（柳澤孝「真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵（二）」『美術研究』302号 1976年3月）。

「年中行事絵巻」(模本のみ現存、原本 12 世紀後半)

- \* 後白河院の命で制作され、蓮華王院宝蔵に籠められた(『古今著聞集』巻第十一「画図」)。
- \* 最勝光院障子絵を描くなど後白河院側近の絵師として活躍した宮廷絵師・常磐源二光長(『吉記』承安三年<1173>七月十二日条、『玉葉』承安三年九月九日条)が描いたという伝承が室町時代末(『言継卿記』天文十八年<1549>九月十一日条に「光長」とあり)から存在するか。

宮内庁書陵部所蔵「年中行事絵巻鷹司家旧蔵模本」全二十巻 紙本白描 江戸時代末期

個人所蔵「年中行事絵巻住吉家伝来模本」全十六巻 紙本著色・紙本白描

寛文二年<1662>頃、住吉如慶・具慶模

- \* 「年中行事絵巻住吉家伝来模本」巻 1 巻末の住吉如慶による奥書から、土佐派よりわかれて住吉派を創立する際に、住吉派代々の手本とするために模写したものとわかり、従って、原本に忠実な丹念な模本だと考えられる(黒田泰三『伴大納言絵巻』における人物表現の特徴―旧永久寺伝来『真言八祖行状図』との比較を参考にして―『新編名宝日本の美術 第 12 巻 伴大納言絵巻』小学館 1991 年 4 月)。また、同奥書にも、原本の「絵者光長」とある。
  - ・ 東京国立博物館所蔵甲巻系断簡の向かって右端の蛙の姿態・服制が、「年中行事絵巻住吉家伝来模本」巻 11 の稲荷祭の馬長行列中の人物と極めて近似する(福井利吉郎「高山寺絵本と其の二作家(定智と覚猷と)」『岩波講座 日本文学 絵巻物概説 (上)』岩波書店 1932 年 5 月)。
  - ・ 「年中行事絵巻住吉家伝来模本」巻 16 の賀茂祭の行列に見える風流傘に、甲巻と良く似た造り物が載る(下店静市「高山寺鳥獸戯画卷の再検討」『東洋美術』20 号 1934 年 6 月)。
  - ・ 乙巻の牛の角合わせとほぼ同じ図様が、「年中行事絵巻鷹司家旧蔵模本」巻 6 の園韓神祭の段に見出せる(上野憲示『鳥獸戯画』甲巻の復原『美術研究』292 号 1974 年 3 月)。
- ◎ 甲巻と共通する姿態表現・服制が「住吉家伝来模本」(逃げる犯人と追う検非違使下部・遊行の聖・稲荷祭の馬長行列の人物)と「田中家所蔵別本」(長唐櫃や折櫃を運ぶ様子)に見出せる。乙巻の犬のように後ろ脚で立ち上がって喧嘩する馬が「鷹司家旧蔵模本」に見える(前掲、拙稿)。

出光美術館所蔵「伴大納言絵巻」全三巻 国宝 紙本著色 12 世紀後半

- \* 「年中行事絵巻住吉派模本」との様式上の近さから、早くから宮廷絵師・常磐源二光長真筆とされる(住吉広行(1755~1811)編『倭錦』。行瀧精一「伝藤原光長筆 伴大納言画卷」『国華』176 号 1905 年 1 月。福井利吉郎「伴大納言絵と常磐光長」『岩波講座 日本文学 絵巻物概説 (下)』岩波書店 1933 年 4 月。前掲、黒田泰三氏論文など)。
- ◎ 馬・犬の描写表現が、乙巻のそれらと近似。甲巻と共通する姿態表現。甲巻と共通する演劇的空間構成・ある瞬間を描いているようで時間経過をも表現する画面展開(前掲、拙稿)。

「彦火々出見尊絵巻」(模本のみ現存、原本 12 世紀後半)

\*15 世紀中頃には、「伴大納言絵巻」「吉備大臣入唐絵巻」とともに、若狭国松永庄新八幡宮に伝来していた(『看聞日記』嘉吉元年(1441)四月二十六日条)。

\*模本からわかる人物のフォルム・画面展開の手法等に「伴大納言絵巻」と高い共通性が見出せること(住吉広行編『倭錦』。拙稿『彦火々出見尊絵巻』の姿態表現と画面構成について—『伴大納言絵巻』との共通項に注目しながら—『美術史論叢』22 号 2006 年 3 月などから、宮廷絵師・常磐源二光長周辺で制作されたと考えられる)。

福井・明通寺所蔵「彦火々出見尊絵巻模本」全六巻 紙本著色 17 世紀 狩野種泰模

\*住吉派の絵師によって写された宮内庁書陵部所蔵「彦火々出見尊絵巻模本」(17 世紀)と姿態表現も含めた画面内容がほぼ一致することから、いずれも原本に忠実な模本と考えられる(小松茂美『彦火々出見尊絵巻の研究』東京美術 1974 年 10 月)。

◎麒麟・水犀・頭部が獅子の霊獣は、乙巻の麒麟・水犀・獅子と極めて近似する(前掲、拙稿『鳥獣人物戯画』甲・乙巻の筆者問題について—宮廷絵師制作の可能性をめぐって—)。

◎まず出来事の結果を絵巻の進行方向を逆行するように描き、それによって鑑賞者を十分に惹きつけた後に、その原因を画面に登場させるという甲巻第 13~14 巻と共通する画面展開が見られる。

【甲・乙巻の筆者問題を決着させるためには、以下のことを解明する必要があるか？】

●同時代の宮廷絵師制作絵巻と共通する姿態表現が存在する

同時代の絵仏師も同じ紙形を所持していた→絵仏師の可能性あり

同じ紙形は、同時代においては宮廷絵所内のみで使用されていた→宮廷絵師

●動物や霊獣の描写表現が同時代の宮廷絵師制作絵巻のそれと極めて近似

同時代の絵仏師も、宮廷絵師と同じ手本で動物・霊獣の描き方を学んだ→絵仏師の可能性あり

同時代の絵仏師も、宮廷絵師と同じ手本で学んだとは考えにくい→宮廷絵師

●卷子の形式を活かした優れた画面展開が認められる

12 世紀後半には、絵仏師もそのような画面展開を自在にこなしていた→絵仏師の可能性あり

卷子の形式を活かした高レベルの画面展開は宮廷絵師ならではのもの→宮廷絵師

●寺院における文書・聖經用の範疇の料紙を使用している

そのような紙は、寺院内でのみ用いられた→絵仏師

宮廷絵師に故意にそのような紙で描かせることもあり得た→宮廷絵師の可能性あり

## 第4講「誰が描いたのか？—絵師をめぐる議論—」

### ⑩絵仏師説の可能性—鳥羽僧正覚猷説と当時の寺院の社会性の観点から—

京都国立博物館保存修理指導室長  
大原嘉豊

#### 1. 鳥羽僧正覚猷筆説から宮廷絵所絵師説と絵仏師説へ

##### ●「鳥獣戯画」作者を鳥羽僧正覚猷（一〇五三～一一四〇）とする説

##### ●宮廷絵所絵師説

秋山光和「「鳥獣戯画」甲巻の残欠二種——新出本と益田家旧蔵本——」『美術研究』二九二号、一九七四年（秋山光和『日本絵巻物の研究 上』中央公論美術出版、二〇〇〇年所収）

上野憲示「『鳥獣戯画』甲巻の復原」『美術研究』二九二号、一九七四年

同「「鳥獣人物戯画」の復原と観照」『鳥獣人物戯画（日本絵巻大成第六巻）』中央公論社、一九七七年

五月女晴恵「「鳥獣人物戯画」甲巻の主題について」『美術史学』二十三号、二〇〇二年（辻 惟雄『鳥獣人物戯画』小学館、二〇〇七年所収）

同「『鳥獣人物戯画』甲・乙巻の筆者問題について—宮廷絵師制作の可能性をめぐる—」『仏教芸術』二六六号、二〇〇三年

同「『鳥獣人物戯画』乙巻の源をめぐる—考察—（その一）当時の動物・霊獣に対する認識と、正倉院宝物に描かれた霊獣図に着目しながら—」『北九州市立大学文学部紀要』八十号、二〇一一年

同「「鳥獣人物戯画」乙巻の源をめぐる—考察—（その二）正倉院宝物に見える「走獣図」群に着目して—」『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える』竹林舎、二〇一二年

##### ●絵仏師説

中野玄三「密教図像と鳥獣戯画」『学叢』二号、一九八〇年（中野玄三『日本仏教絵画研究』法蔵館、一九八二年所収）

同「「密教図像と鳥獣戯画」再論（上）・（下）」『仏教芸術』二八三・二八四号、二〇〇五・二〇〇六年（中野玄三『続々日本仏教美術史研究』思文閣出版、二〇〇八年所収）

同「東アジアの動物表現」中野玄三・加須屋誠『仏教美術を学ぶ』思文閣出版、二〇一三年

##### ●宮廷絵所絵師説と絵仏師説の論点

- ・絵仏師と宮廷絵師との作風の違いを前提
- ・絵仏師論では仏教図像から、宮廷絵師論では絵巻物等から類似例を探索  
→技法的な面からの議論は、どちらも根拠としては成立。水掛け論になる。

## 2. 「柳之御所戯画」と嗚呼絵の流行

### ●「折敷断片」の発見

- ・岩手県平泉町にある国指定史跡「柳之御所」より発見された蛙の墨描きの絵

### ●鳥羽僧正覚猷筆説の再検討

- ・鑑賞用戯画「嗚呼絵」の流行
- ・「鳥獣戯画」の表現の同時代的要素

## 3. 「柳之御所戯画」と平安時代末の社会状況

### ●都と鄙の寺院ネットワーク

- ・京都の文化／奥州藤原氏の平泉の文化

### ●「金売り吉次」が象徴すること

- ・『平家物語』等に登場する奥州の商人：奥州で産出する金を都で商う
- ・実在については見解が分かれるが、当時の商業状況を象徴する存在としての「金売り吉次」
- ・平泉の旧衣川村（現在は奥州市）の長者原廃寺跡→吉次の邸館跡との伝承
- ・平泉の「柳之御所戯画」は寺院と商業という観点から説明が可能

### ●「鳥獣戯画」の性格

- ・「ものづくし」の性格→童蒙教育の用途
- ・「往来物」「庭訓物」

### ●院政期の寺院の側面

- ・寺院における社会教育、商業と教育の密接な関係
- ・荘園領主としての寺院→余剰産物の交易、地方との交通の結節⇒商工業と深い関係

## 4. 動物擬人化と寺院社会

### ●「鳥獣戯画」の動物

- ・中国における月世界の動物：兎＝月兎、蛙＝蟾蜍（せんじょ。蛙）
- ・狐、猿＝『大唐西域記』巻七「兔王本生譚」

### ●院政期における仏教説話文学の盛行

- ・『今昔物語集』など、動物が主人公となる本生譚（インドで発達した釈迦の前世物語）
- ・戯画の受容層と仏教説話の受容層の重なり  
⇒鳥羽僧正に筆者比定を行なった近世の考証の妥当性

## 第5講「何のために描かれたのか？—主題と制作背景を探る—」

## ⑪正倉院宝物と鳥獣戯画

東京大学大学院人文社会系研究科准教授  
増記隆介

## 1、「鳥獣戯画」の成り立ち

●乙巻→甲巻二→甲巻一→丙巻（人物戯画）→丙巻（鳥獣戯画）→丁巻（増記私案）

乙巻 宮廷絵師と絵仏師（画僧）による動物画 伝統的な動物図様・白描図像の動物・宋画

甲巻 乙巻、正倉院宝物、蓮華王院宝蔵絵巻への視線。甲巻一は宮廷絵師、甲巻二は絵仏師

丙巻 甲巻のパロディ

●素材の問題 「杉原紙」と白描 →蓮華王院宝蔵絵巻のパロディとしての「鳥獣戯画」

●丁巻 天福元年（1233）頃後堀河上皇周辺で描かれたか？→「絵づくの貝おほひ」（『古今著聞集』）

## ①「華嚴宗祖師絵伝」旧裏打文書

「華嚴宗祖師義湘大師絵四\*（\*は巻と同義）明恵上人絵三\*元暁大師絵二\*以上九\*獸物絵上中下同類\*二\*（開田殿□□本）都合十一巻本是高山寺東經藏之具也先年兵乱之時足輕共執散為彼兵火所々焼失了然坊人共拾集之間此坊取置也寺家有再興之時節可令奉納彼藏也後世留守門人可得其意不可私\*記置之也時元龜庚午（一五七〇）七月廿一日羊僧齋怡（花押）」

・「絵づくの貝おほひ」と蓮華王院絵巻

②『古今著聞集』卷第十一「後堀河院の御時絵づくの貝おほひの事」「（前略）天福元年の春の比、院、藻壁門院、方をわかつて、絵づくの貝おほひありけり（中略）其後秘藏の絵どもは出されけり（後略）」

③貞永二年（1233）三月二十二日付尊性法親王書状「兼又先度被申入候六道絵并第廿櫃と西京堅女絵櫃と可被申出候」

④天福二年（1234）三月十日付同書状「抑御絵目六返進上候、此内十二櫃并第九櫃六道御絵此等を暫可申出之由思給候」

⑤『民経記』天福元年五月廿二日条「廿二日丙寅、天晴、入夜雨下。予如法午刻著束帶參蓮華王院（中略）予入宝蔵中、繁茂同入、年中行事絵四合又絵櫃第六第九櫃二合、可被取出云々」

## 2、蓮華王院宝蔵絵巻と「鳥獣戯画」

## ●後白河院時代に制作された宝蔵絵

①年中行事絵巻 六十巻 ②保元相撲図絵巻 ③保元城南寺競馬絵巻 ④玄宗皇帝絵巻六巻

⑤仁安御禊行幸絵巻七巻 ⑦承安五節絵巻三巻 ⑧末葉露大将絵巻

⑨「白描下絵料紙般若理趣経」（大東急記念文庫）奥書「後白川法皇□禪尼之御絵、未終功之处、崩御。仍以故紙写此経。執筆大納言閼梨静遍。梵字宰相閼梨成賢云々。建久四年八月 日 以此経奉受

僧正御房了 深賢」 ⑩「粉河寺縁起絵巻」(粉河寺)

・その他 六道絵に属すると想定される絵巻群

ア. 旧関戸家本「病草紙」(京都国立博物館、九州国立博物館ほか) 15 図、「白子図」、「肥満女図」(福岡市美術館)「侏儒図」、「背骨の曲がった男」(文化庁)「鶏に眼をつつかせる女図」

イ. 「小法師の幻覚を生ずる男図」(香雪美術館)

ウ. 旧曹源寺本「餓鬼草紙」(京都国立博物館)

エ. 旧河本家本「餓鬼草紙」(東京国立博物館)

オ. 旧原家本(東京大聖院)「地獄草紙」(奈良国立博物館)

カ. 旧安住院本「地獄草紙」(東京国立博物館)

キ. 旧益田家本「沙門地獄草紙」(奈良国立博物館・五島美術館・個人)

ク. 旧益田家本「辟邪絵」(奈良国立博物館)

### 3、後白河法皇と正倉院宝物

・後白河法皇と大仏開眼供養

#### ①『山槐記』文治元年(1185)八月二十八日条

廿八日戊寅(つちのえとら)、天陰、午の刻許りより甚だしく雨ふる。今日東大寺大仏開眼のことあり、地震一度(中略)午の刻、法皇臨幸(御歩行)法皇大仏の仮階を昇り開眼せらる(中略)京中ならびに諸国より参詣の輩、寺中に満つ(中略)法皇の御宿所、正倉院の前に之を造る(中略)大仏殿前に龍頭一本を立て幡を懸ける、これ天平供養の物これ一物の残りと云々、また件の時の開眼筆は異なるもの(長さ一尺ばかり)(中略)法皇天平開眼の筆を以て開眼奉らる(後略)

・後白河法皇と正倉院宝物

#### ②『兵範記』嘉応二年(1170)四月二十日条

廿日庚子(かのえね)、天晴れる。法皇、東大寺勅符藏を開き、宝物を御覧ず。左小弁経房(蔵人左兵衛権佐)を勅使となし、大監物ならびに典を引率し参仕す、珍宝兼ねて御所に運び出し歴覧す、入道、その席に候ぜらると云々(『史料大成』本による書き下しは発表者)

#### ③『国家珍宝帳』天平勝宝八歳(756)

御屏風壹佰壹 画屏風廿一疊 鳥毛屏風三疊 鳥画(書か)屏風一疊 夾纈六十五疊 縹纈十疊  
山水画屏風一具両疊十二扇\* 国図屏風六扇\* 大唐勤政楼前観楽図屏風六扇\* 大唐古様宮殿  
画屏風六扇\* 大唐古様宮殿画屏風六扇\* 古様山水画屏風六扇\* 古様本草画屏風一具両疊十  
二扇\* 子女画屏風六扇\* 古人画屏風一具両疊八扇\* 舞馬屏風六扇\* 子女屏風六扇\* 古  
様宮殿画屏風六扇\* 素画夜遊屏風一具両疊十二扇\* 鳥毛篆書屏風六扇 鳥毛立女屏風六扇  
山水画屏風六扇\* 鳥毛貼成文書屏風六扇 鳥書屏風六扇 百濟画屏風\* 古人宮殿屏風六扇\*  
古人画屏風六扇\* 山水夾纈屏風十二疊各六扇 菴室草木鶴夾纈屏風七疊各六扇 驕鹿草木夾纈  
屏風十七疊各六扇 鳥木石夾纈屏風九疊各六扇 鷹木夾纈屏風一疊六扇 鷹鳥夾纈屏風四疊各六  
扇 鷹鶴夾纈屏風一疊六扇 古人鳥夾纈屏風四疊各六扇 鳥草夾纈屏風十疊各六扇 縹纈屏風十  
疊各六扇

## 第5講「何のために描かれたのか？—主題と制作背景を探る—」

### ⑫鳥獣戯画の主題解釈は可能か？

山種美術館特任研究員  
三戸信恵

#### 1. 鳥獣戯画の構想をめぐって

##### ●甲巻を主軸とした解釈の試み

- ・主題：風刺、六道思想、年中行事、御霊会、動物説話...
- ・目的：子供向け、神霊の慰撫、過差禁制...

##### ●甲巻・乙巻をセットで捉えた場合

- ・動物の種類が重複しない→意図的な振り分けがなされた可能性
- ・近年の修理による知見 [参①]：甲巻後半と乙巻とで料紙の質に近似が認められる
- ・甲・乙巻に共通するフレーム：〈類聚〉／〈動物〉
- ・動物主題の先例：正倉院宝物（五月女晴恵氏 [参②]、増記隆介氏 [参③]）→後白河院が制作に関与した可能性

#### 2. 中国絵画のインパクト—動物主題のフレーム—

##### ●『宣和画譜』に記載される動物主題

- ・辻惟雄氏 [参④] 動物戯画・白描動物画＋「新たに輸入された動物生態画」の刺激＝甲巻・乙巻
- ・「闘牛図」／親子連れ「子母鶏図」「乳虎図」「子母犬図」「子母戯猿図」...
- ・動物の群戯 易元吉「獐猿群戯図」「引雛戯獐猿図」「獐猿群戯図」→ 甲巻
- ・「田野荒寒之景」「枯槁」「古木」→ 乙巻

##### ●現存作例との比較

- ・黄筌「写生珍禽図巻」（中国・北京故宮博物院）：複数種の生き物を集める
- ・崔白「双喜図」（台北国立故宮博物院）：冬枯れの平原 鵲と兎 → 乙巻 鷹と犬 [参⑤]
- ・「扇面法華經冊子」巻6（四天王寺）：柏に鷹と兎 [参⑥]
- ・「百馬図巻」（中国・北京故宮博物院） → 乙巻、甲巻
- ・『本願寺本三十六人家集』『伊勢集』（常盤山文庫他） 舶載の蠟牋 [参⑦]
- ・伝易元吉「猴猫図巻」（台北国立故宮博物院）：複数種の動物、豊かな表情 → 甲巻 [参⑧]
- ・堅白子「草虫図巻」（中国・北京故宮博物院）：草虫画題と風刺、蝦蟇 → 甲巻 [参⑧]
- ・梅堯臣「観居寧画草虫」 [参⑨]
- ・『本願寺本三十六人家集』『忠見集』（西本願寺） 草虫図を連想させる
- ・島田修二郎氏 唐紙と鳥獣戯画の親近性を示唆 [参⑩]
- ・『本願寺本三十六人家集』『元真集』（西本願寺）：秋草に兎と蜻蛉

### 3. テキストを通じた解釈の可能性

#### ●兎・蛙・猿と月の連想

- ・五月女晴恵氏 夜・秋草・兎・蛙 → 月夜の情景〔参⑪〕
- ・「猿猴捉月」(『宝物集』)、『今昔物語集』「三獣行菩薩道菟焼身語」(兎・猿+狐)〔参⑤、⑫〕
- ・「年中行事絵巻」風流傘の飾り物、「折敷片」(柳之御所遺跡出土品、岩手県教育委員会)

#### ●六畜(馬・牛・羊・犬・豕・鶏)

- ・『延喜式』巻第三「臨時祭」 「凡触穢惡事忌忌者…六畜死五日…」
- ・西山良平氏〔参⑬〕馬・牛・犬：明確な穢れ／狐・狼・鹿：曖昧／猫・兎・鳥類：穢れと意識されず
- ・馬・牛・鷹・犬・鶏 → 墓室壁画の画題

#### ●乙巻と『今昔物語集』

- ・『今昔物語集』天竺・震旦・本朝の三部構成 → 乙巻にも三国世界観的な意識〔参⑤〕
- ・霊獣を列举することの意味〔参②〕 「十二霊獣図巻」(静嘉堂文庫美術館)

#### ●鳥・獣・虫の歌の流行〔参⑭、⑮〕

- ・『十題百首』：鳥／獣(馬・鹿・猿・犬・狐・熊・牛・猪・虎・狼・鼠)／虫(蛙)
- ・『六百番歌合』：春の部(蛙)／恋の部(寄鳥恋・寄獣恋・寄虫恋)
- ・中国の動物主題(花鳥、畜獣、草虫)がイメージとテキストの双方に影響を与えた可能性

#### ◆参考文献

- ① 高山寺監修・京都国立博物館編『鳥獣戯画 修理から見えてきた世界—国宝 鳥獣人物戯画修理報告書』(勉誠出版、2016年)
- ② 五月女晴恵「『鳥獣人物戯画』乙巻の源をめぐり一考察—(その二)正倉院宝物に見える「走獣図」群に着目して—」(『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える』竹林舎、2012年)
- ③ 増記隆介「正倉院から蓮華王院宝蔵へ—古代天皇をめぐり絵画世界」(『天皇の美術史—古代国家と仏教美術』吉川弘文館、2018年)
- ④ 辻惟雄『絵巻=鳥獣人物戯画と鳴呼絵』(日本の美術 300、至文堂、1991年)
- ⑤ 拙稿「『鳥獣戯画』の謎を解く鍵—主題と構想を探るための手がかり」(『日本美術全集』5、小学館、2014年)
- ⑥ 中島博「やまと絵の花鳥における宋画の影響について」(『花鳥画の世界』1、学習研究社、1982年)
- ⑦ 四辻秀紀「平安時代の調度手本にみられる唐紙・蠟牋についての一考察」(『金鯢叢書』18、1998年)
- ⑧ 板倉聖哲「鳥獣戯画の前提 中国絵画の視点から」(土屋貴裕・筆者監修・著、板倉聖哲著『もっと知りたい 鳥獣戯画』、東京美術、2020年)
- ⑨ 衣若芬『觀看・叙述・審美—唐宋題画文学論集—』(中央研究院中国文哲研究所、2004年)
- ⑩ 島田修二郎・戸田禎佑・佐々木丞平・武田恒夫・辻惟雄「日本の花鳥画 成立と展開」(『花鳥画の世界』11、学習研究社、1983年)
- ⑪ 五月女晴恵「《鳥獣人物戯画》甲巻は、月夜の情景だった……」(『美術手帖』901、2007年)
- ⑫ 宮川禎一『鳥獣戯画のヒミツ』(淡交社、2021年)
- ⑬ 西山良平『都市平安京』(京都大学学術出版会、2004年)
- ⑭ 植木朝子『梁塵秘抄の世界 中世を写す歌謡』(角川学芸出版、2009年)
- ⑮ 伊藤大輔『鳥獣戯画を読む』(名古屋大学出版会、2021年)

## 第6講 パネルディスカッション

### 「徹底討論！鳥獣戯画研究を究める」

#### ■モデレーター

土屋貴裕（東京国立博物館特別展室主任研究員）

#### ■パネリスト

大槻信（京都大学大学院文学研究科教授）

皿井舞（東京国立博物館平常展調整室長）

朝賀浩（宮内庁長官官房参事官）

鬼頭智美（東京国立博物館上席研究員(国際交流)）

大原嘉豊（京都国立博物館保存修理指導室長）

井並林太郎（京都国立博物館企画室研究員）

古川攝一（東京国立博物館絵画・彫刻室研究員）

猪熊兼樹（東京国立博物館特別展室長）

五月女晴恵（北九州市立大学文学部教授）

増記隆介（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

三戸信恵（山種美術館特任研究員）

#### ■ディスカッションテーマ

○鳥獣戯画をめぐる“5W1H”

When：いつ

Where：どこで

Who：だれが

What：何を = 鳥獣戯画を

Why：なぜ

How：どのように

○高山寺の歴史と鳥獣戯画：伝来や評価の歴史

○描かれているもの、描かれていること、描き方の特質は？

○院政期絵巻としての鳥獣戯画

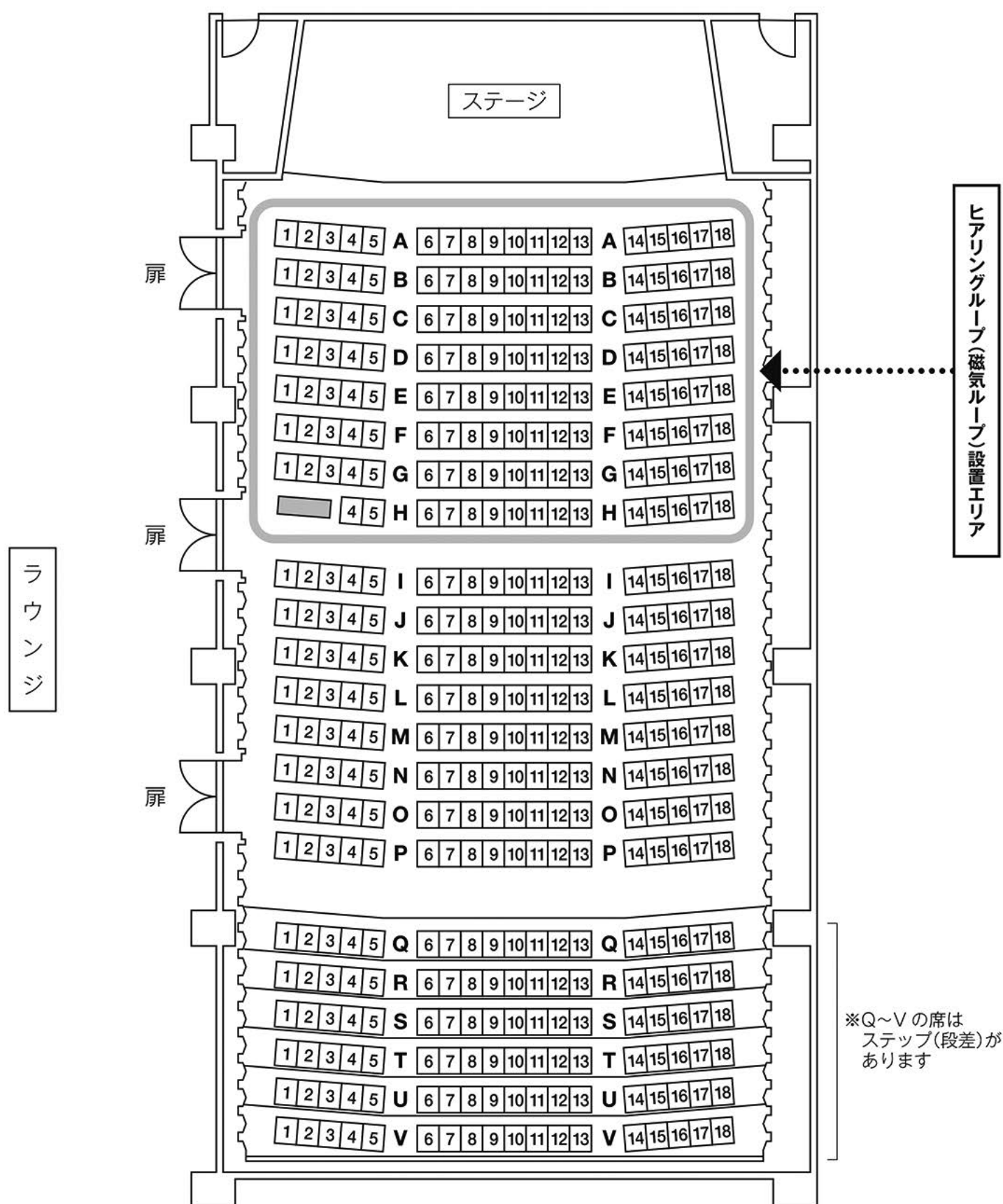
令和 3 年度 東京国立博物館 連続講座  
「鳥獣戯画研究の最前線」

発行日：令和 3 年 4 月 23 日  
編集・発行：東京国立博物館  
印刷：大協印刷株式会社

表紙：国宝 鳥獣戯画 甲巻（部分） 京都・高山寺蔵  
31頁：国宝 鳥獣戯画 乙巻（部分） 京都・高山寺蔵

\*本書の全部または一部を著者の許可なく転載・複製することを禁じます

# 平成館大講堂 座席表



車いすスペース ※要事前連絡